

5. 災害調査 北アルプス・槍ヶ岳における雪崩調査 (2008.1.7)

研究代表者	雪氷防災： 上石勲	実施期間	平成 19 年度
研究参加者	雪氷防災： 山口悟		

[目 的]

2007 年 12 月 31 日午後 11 時半頃、岐阜県高山市奥飛騨温泉郷神坂の北アルプスの槍ヶ岳の槍平小屋付近（標高約 1991m）で、テントで休んでいた 2 パーティー計 7 人が巻き込まれ、男性 4 人が窒息死する雪崩事故が発生した。本調査の目的は、現場近くのほぼ同標高の場所で断面観測を行うことにより、雪崩発生の変因等を明らかにし、雪崩災害防止に資することである。

[実施内容]

2008 年 1 月 7 日に、雪崩事故が発生した場所とほぼ同じ標高の新穂高ロープウェイの山頂駅付近（2150m）で、積雪断面観測（雪質、雪温、密度、硬度、剪断強度の測定）を行った。

[成果と効果]

断面観測を行った場所の積雪深は 265 で、事故当時かなりの積雪があったことがわかった。また地面から 170cm の深さに、弱層となりうる“こしもざらめ層(図 1 の矢印)”が観察された。実際の弱層となった層を特定するために雪崩発生の目安になる積雪安定度(SI)を計算した結果、“こしもざらめ層”では、他の層と比べて SI の値が小さい(SI=1.6)ことがわかった。これらの現地調査ならびに近くの気象条件の解析結果より、こしもざらめ層の弱層の上に、12 月 31 日に多量の降雪が降り積もった結果、こしもざらめ層がすべり面となって雪崩が発生した可能性が示唆された。

なお、今後は雪崩の流動モデルを用いて、実際の雪崩がどのように谷を流れていったかについての解析も行う予定である。

[防災行政等への貢献]

上記調査結果と現在試験運用中の雪崩災害予測システムの予測結果とを比較検討することにより、同システムの高度化に貢献出来る。

[成果の発表]

・マスメディア対応 1 件

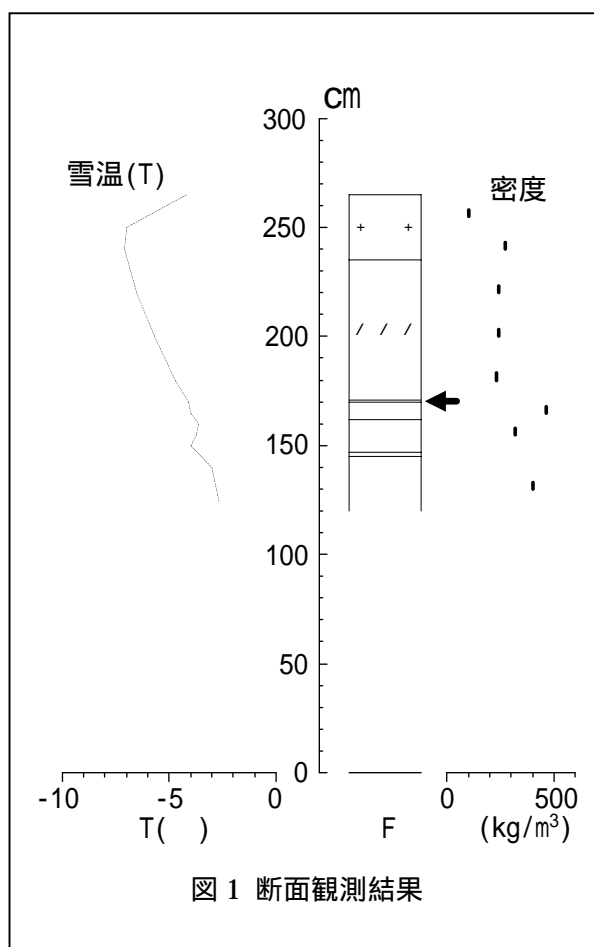


図 1 断面観測結果